

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	小糠星：文苑
Author(s)	水野，露草
Citation	龍南會雜誌， 1 2 0： 7 7 - 7 8
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6025
Right	

戀の埋れ火かくれても、つきやは消えじ世のことごとくに。

(完)

小 糠 星

水野 露 草

初夏の尾張ありせば
月香る、

稲田は水のうはぬるみ、
まひるの日ざし、

沸くつづくの小さき泡沫
はかなげの浮藻の花の眞白さを、
めぐりて消えぬ。

なにとあき遠きざわめき

可憐しう泌み入る胸よ、

あゝ夢ごゝち、初夏の

尾張なりせば。

白鷺の、

伸長頸の見えかくれ、

目路もはるかに、

こ青につゞく伊勢の山、

とび／＼の藁屋の軒にひそ唄の

主こそ立てれ。

母と居る椽に寝に來し、

軟風にはのかに開く、

あゝ紅薔薇、初夏の、

尾張ありせば。

君とわかれしは、

粉雪降るうるみ日なりき、

あゆち瀉わかれの前の一時を、

添ひゆきぬ。灰いろの雲、

ちぎれては波に漬りぬひたひたと、

わきかへるわだ中深に、

長髪のたごろのもつれ我れは見ぬ。

愁はひの背向なで肩

うちふるひすべりし薔薇花かざし、

又の夜は天にかへりて、

星合に玉とや照らめくれなゐの。

若き日は戀の優鳥

胸の巢にちと啼くにあもいとほしみ、

はぐみうはかなきすさび、

よる毎に夢の軀はくりかへし、

追憶の紡車まわす、

悲衰をうつけ心にたもひたね、

明日知らぬ魂のわびしさ、

雲へだてたなじ心に泣く人と、

袖振りてあく、別れしは、

愛知がた湿み日なりき粉雪ふる。

われやこの水

江中 筑紫

いのちの水をぬけいでくやがては『ざわ』の

花さけばはわある空をあふぎつゝ

七十八

撞なるたかぶりの香りをはなち

下を觀る心はうせてゐることも

うちわすれたる花もあり。——睡蓮の華。

そらの白雲さはれ無心や。

いのちの水のたねまなく花の青莖

常久にひたしつちかふ恵みをも

花の香りにけちさけて胸はなげきに

濁ることも『ざわ』の花影いたいげに

うつす心の幸なさよ。——われやこの水。

そらの白雲さはれ無心や。

慈眼うせにしこの花にさげすまれたる

身なれどもそらの白雲わがたみの。——

天魔の風の荒び來て嘲りの花

あともかく散りてのちは、あはれやかの

蒼穹のすがた水にあり。——われやこの水。

そらの白雲幸はあふれぬ。